

看護学生を対象としたデス・エデュケーションに 関する意識調査

別所 史恵・江角 弘道

概 要

看護学生のデス・エデュケーションの認知状況について把握する目的で調査を行い、232名から回答を得た。その結果、①看護学生の“デス・エデュケーション”という言葉の認知は全体の28.0%と低いが、過去に“いのちの教育”は65.9%が学んでいた。②デス・エデュケーションの目的や必要性は多岐にわたるが、看護学生の認識には偏りがあった。教育の時期に関しては、発達段階をふまえた指導方法の確立が必要である。③生涯教育としてデス・エデュケーションは全ての人に必要であり、特に看護学生には重要である。若者は死を考える機会が減少しており、死を身近なものとして捉えられるような看護教育の取り組みを考えていく必要がある。

キーワード：デス・エデュケーション、看護学生

I. はじめに

近年病院で亡くなる人の割合が年々増加しており、厚生労働省の人口動態統計によると、2000年には全死亡者の83.3%を占めた。一方自宅で亡くなる人の割合は13.9%であった。この両者が逆転したのは1976年で、病院死が当たり前の時代になったのはそれほど古いことではない(小谷, 2003)。このように、死が身近なものではなくなってきた現代社会において、『死の準備教育(デス・エデュケーション)』の必要性が高まってきている。

アルフォンス・デーケン(1988)はデス・エデュケーションの主な目的を「死そのものを前もって個人的に体験することはできないが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚を持って自己と他者の死に備えての心構えを習得することはできるし、また必要である」と述べている。そのため、将来看護師などの医療従事者を目指し、日々、病や死といった問題に関わらざるを得ない看護学生にとって、特にデス・エデュケーションを積極的に学んでいく必要性は高いといえる。

そこで今回は、まず看護学生の過去の学びの

現状や認知状況、デス・エデュケーションに対する考えを把握することを目的に調査を行ったので報告する。

II. 目 的

1. 看護学生におけるデス・エデュケーションの認知状況と捉え方について把握する。
2. 一般成人と看護学生では、デス・エデュケーションの認識について違いがあるのかを比較し考察する。
3. 看護学生におけるデス・エデュケーションの方法・取り組み方について検討する。

III. 方 法

1. 対象及び方法

某看護短期大学生291名(1年次生85名, 2年次生80名, 3年次生82名, 専攻科生44名)を対象に調査を実施した。

調査項目は先行研究(赤澤, 2005)を参考に本研究者間で検討し、項目や設問を追加修正したものを使用した。

分析方法は、各質問項目の単純集計を実施後、 χ^2 検定により、各学年による認識の違いと、

過去の学びの経験がある群とない群での目的・必要性・問題点に関する認識の有意差をみた。

2. 実施時期

平成17年7月中に調査票を配布し、8月中のメ切とした。

3. 倫理的配慮

学生には調査の目的、プライバシーの保護、提出は任意であり協力の有無により不利益が生じないこと、データを目的以外に使用しないことを口頭で説明・依頼し、調査票を配布した。調査票の提出によって同意が得られたとした。調査票は無記名であり、データを研究者間で分析の上、取り扱う時は記号化して取り扱った。調査票の回収は、一定期間回収箱を設置して実施した。

IV. 結 果

1. 集計結果

某看護短期大学の学生291名に調査票を配布し、232名(回収率79.7%)の回答があった。回答者の内訳は、1年次生78名(91.8%)、2年次生75名(93.8%)、3年次生48名(58.5%)、専攻科生31名(70%)であった。

デス・エデュケーションは、学校教育の現場では「死についての学び」「いのちの教育」ともいわれているので(鈴木, 2001)、まず、過去の教育の状況を知るために、これらの表現を使用し質問することにした。表1に示すように、過去に65.9%の学生が、死についての学びやいのちの教育を受けたことがあると回答した。その教育の場は「看護短大にはいつから」が33.5%で最も多かった。デス・エデュケーションという言葉の認知は全体の約3割(28.0%)程度で(表2)、そのうち情報の媒体は「学校」が最も多かった。デス・エデュケーションの内容についての認識は、約1割(10.5%)と少なかった(表3)。

質問5以降は、「デス・エデュケーション(death education 死への準備教育)とは、人はなぜ死ぬのか、死んだらどうなるのか、大切な人を失った悲しみをどうやって乗り越えるのか、といった問いから始まり、死を受容する、生をより充実させる、というような個人の結論を導

き出す手助けとなるものである。アルフォンス・デーケン¹⁾は、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚を持って自己と他者の死に備えての心構えを習得することはできるし、また必要でもあると述べています。」という説明文の後に質問を続けた。看護学生の多くは、デス・エデュケーションの必要性を「子どもが命を軽視しているような傾向にあるから」と捉えており、必要性を感じないと回答した学生はいなかった(図1)。デス・エデュケーションの適切な開始時期については「小学校5・6年から」との回答が最も多かった(表4)。また、デス・エデュケーションの目的は「命の大切さ・尊さを教えること」、問題点としては「指導方法が確立されていないこと」と捉えていた学生が多かった(図2・3)。また、デス・エデュケーションにおいて、特に勉強したい、取り上げて欲しいと思う内容・テーマについて自由記載で質問した。その結果「ターミナルケア」が11名と最も多かった(表5)。

2. 分析結果

過去の学びの状況について、各学年の違いによる有意差はなかった。デス・エデュケーションという言葉の認知には、学年の違いによる有意差がみられた($p<0.001$)。3年次生においては48名中、聞いたことが「ある」との回答は33名(68.9%)であり、半数をこえていた。また調整済み残差から、1年次生と3年次生における、デス・エデュケーションの聞いたことが「ある」「ない」に大きく特徴がみられた。(表2)。

過去の学びの経験が「ある群」と、「ない・わからない群」での、デス・エデュケーションの目的・必要性・問題点に関する認識に有意差があるかをみた。その結果、目的の「死へのプロセスや死にゆく患者の多様なニーズを理解すること」の項目で有意差がみられた($p<0.01$)(表6)。

V. 考 察

1. デス・エデュケーションの認知状況

看護学生の“デス・エデュケーション”とい

看護学生を対象としたデス・エデュケーションに関する意識調査

表1 過去の学び

単位：人 () 内%

| 質問 | 回答 | 1年 | 2年 | 3年 | 専攻科 | 計 |
|---|-------|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 質問1 「死についての学び」や「いのちの教育」を受けたことがありますか [n=232] | ある | 49(21.8) | 48(21.0) | 35(16.1) | 21(9.6) | 153(65.9) |
| | ない | 14(6.5) | 5(2.3) | 6(2.7) | 4(1.8) | 29(12.5) |
| | わからない | 14(6.5) | 22(10.0) | 7(3.1) | 6(2.7) | 49(21.2) |
| | 無記入 | 1(0.4) | — | — | — | 1(0.4) |
| | 計 | 78(100.) | 75(100.) | 48(100.) | 31(100.) | 232(100.) |
| 質問2 1であると答えたひとつについて、それはいつだったでしょうか (複数回答) [n=153] | 小学 | 10 | 10 | 5 | 5 | 30(13.8) |
| | 中学 | 21 | 15 | 9 | 2 | 47(21.6) |
| | 高校 | 27 | 18 | 6 | 5 | 56(25.7) |
| | 看護短大 | 11 | 26 | 26 | 10 | 73(33.5) |
| | その他 | — | 2 | 1 | 6 | 9(4.1) |
| | 無記入 | 2 | — | 1 | — | 3(1.3) |
| | 計 | 71(32.6) | 71(32.6) | 48(22.0) | 28(12.8) | 218(100.) |

表2 デス・エデュケーションの認知の有無

n=232

| 学年*** | 1年生 | 度数 (人) | 質問3-1 デス・エデュケーションを聞いたことが | | 合計 |
|-------|-----|---------------|--------------------------|------|------|
| | | | ある | ない | |
| | | 6 | 72 | | 78 |
| | | 学年ごとの% | 7.6 | 92.3 | 100 |
| | | 言葉の認知の有無による % | 9.2 | 43.1 | 33.6 |
| | | 調整済み残差 | -4.9 | 4.9 | |
| | 2年生 | 16 | 59 | | 75 |
| | | 学年ごとの% | 21.3 | 78.6 | 100 |
| | | 言葉の認知の有無による % | 24.6 | 35.3 | 32.3 |
| | | 調整済み残差 | -1.5 | 1.5 | |
| | 3年生 | 33 | 15 | | 48 |
| | | 学年ごとの% | 68.7 | 31.2 | 100 |
| | | 言葉の認知の有無による % | 50.7 | 8.9 | 20.6 |
| | | 調整済み残差 | 7 | -7 | |
| | 専攻科 | 10 | 21 | | 31 |
| | | 学年ごとの% | 32.2 | 67.7 | 100 |
| | | 言葉の認知の有無による % | 15.3 | 12.5 | 13.3 |
| | | 調整済み残差 | 0.5 | -0.5 | |
| 合計 | | 65 | 167 | | 232 |
| | | 学年ごとの% | 28 | 71.9 | 100 |
| | | 言葉の認知の有無による % | 100 | 100 | 100 |

***p>0.001

表3 情報の媒体と内容理解

単位：人 () 内%

| 質問 | 回答 | 1年 | 2年 | 3年 | 専攻科 | 計 |
|--|-----------|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 質問3-2 あると答えた人は、どこで聞いたことがありますか (複数回答) [n=65] | 学校 | 2 | 7 | 26 | 7 | 42(55.3) |
| | 講演会・勉強会 | 4 | 6 | 5 | — | 15(19.7) |
| | 書籍 | 3 | 2 | 5 | 3 | 13(17.1) |
| | マスコミ | — | 2 | 3 | — | 5(6.6) |
| | 友人・知人 | — | — | 1 | — | 1(1.3) |
| | 計 | 9(11.8) | 17(22.4) | 40(52.6) | 10(13.2) | 76(100.) |
| 質問4 デス・エデュケーションの内容について知っていますか [n=232] | よく知っている | — | — | 1(2.1) | 1(3.2) | 2(1.0) |
| | ある程度知っている | 3(3.8) | 4(5.3) | 11(22.9) | 4(12.9) | 22(9.5) |
| | あまり知らない | 13(16.7) | 24(32.0) | 21(43.8) | 8(25.8) | 66(28.4) |
| | 全く知らない | 60(76.9) | 42(56.0) | 13(27.1) | 17(54.8) | 132(56.9) |
| | 無記入 | 2(2.6) | 5(6.7) | 2(4.1) | 1(3.2) | 10(4.3) |
| | 計 | 78(100.) | 75(100.) | 48(100.) | 31(100.) | 232(100.) |

表4 デス・エデュケーションの開始時期

単位：人 () 内%

| 質問 | 回答 | 1年 | 2年 | 3年 | 専攻科 | 計 |
|--|--------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 質問6 デス・エデュケーションはいつからはじめたらよいと思いますか [n=232] | 小学入学前 | 8(10.2) | 8(10.6) | 7(14.5) | 5(16.1) | 28(12.0) |
| | 小学1・2年 | 5(6.4) | 11(14.6) | 13(27.0) | 8(25.8) | 37(15.9) |
| | 小学3・4年 | 19(24.3) | 18(24.0) | 10(20.8) | 10(32.2) | 57(24.5) |
| | 小学5・6年 | 26(33.3) | 26(34.6) | 6(12.5) | 6(19.3) | 64(27.5) |
| | 中学 | 13(16.6) | 10(13.3) | 7(14.5) | 2(6.4) | 32(13.7) |
| | 高校 | 5(6.4) | 2(2.6) | 4(8.3) | — | 11(4.7) |
| | 無記入 | 2(2.5) | — | 1(2.0) | — | 3(1.2) |
| | | 計 | 78(100.) | 75(100.) | 48(100.) | 31(100.) |

表5 取り上げて欲しいテーマ

n=66

| 記 載 内 容 | (人) | 記 載 内 容 | (人) |
|-----------|-----|-----------|-----|
| ターミナルケア | 11 | 子どもにとっての死 | 3 |
| 延命治療と尊厳死 | 7 | 脳死・臓器移植 | 2 |
| 自殺 | 7 | 家族ケア | 2 |
| グリーフケア | 6 | 生命の尊厳 | 1 |
| 死後の世界 | 5 | カウンセリング | 1 |
| 死生観 | 4 | 安楽死 | 1 |
| 殺人 | 3 | リビング・ウィル | 1 |
| 生とは、死とは | 3 | 戦争 | 1 |
| ホスピス・緩和ケア | 3 | その他 | 2 |
| 心理・受容 | 3 | | |

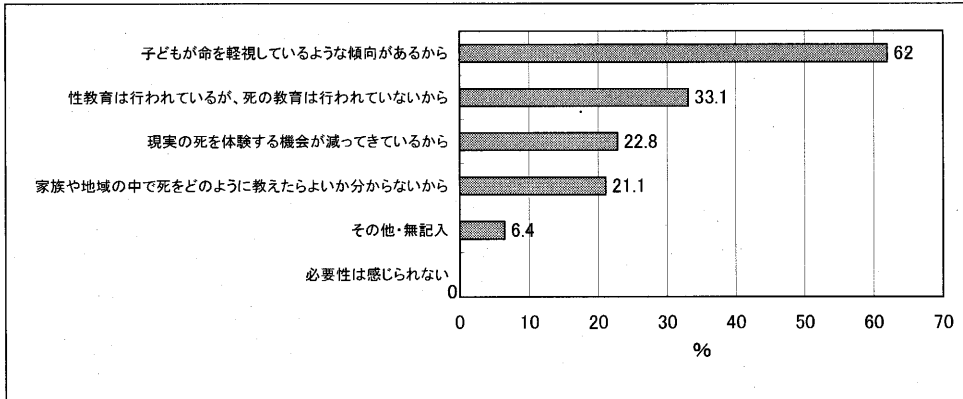


図1 デス・エデュケーションはどのように必要だと思いますか (複数回答) [n=232]

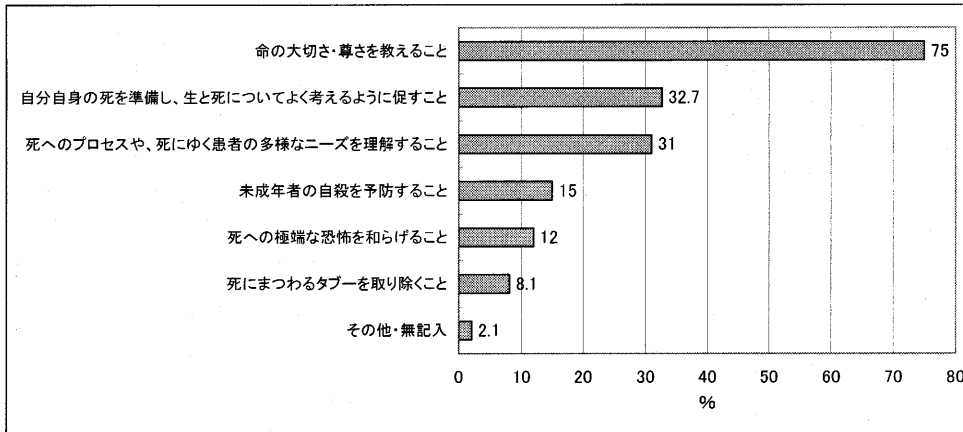


図2 デス・エデュケーションの目的は何だと考えますか (複数回答) [n=232]

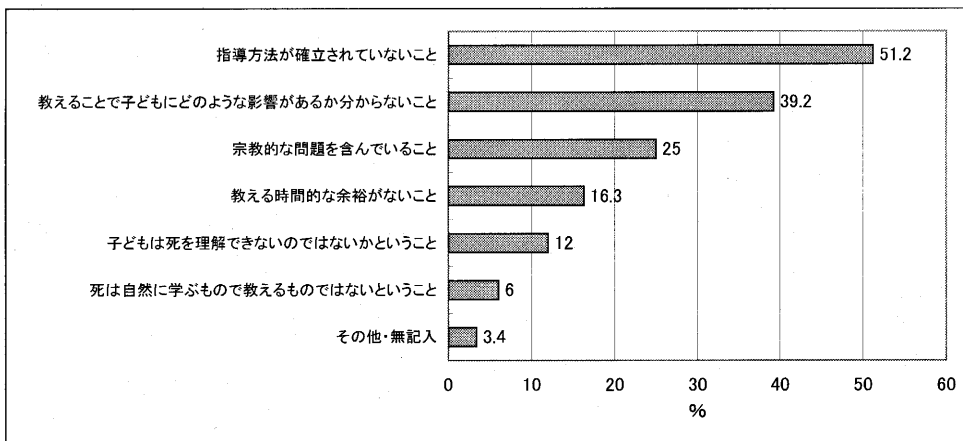


図3 デス・エデュケーションをする場合の問題点は、何だと考えますか (複数回答) [n=232]

表6 過去の学びの「ある」・「なし」による影響 n=232 単位：人

| 質問1 | 質問5 必要性 | | | | | 合計 |
|----------|---------|------|-----------|----------|-----|-----|
| | 体験の減少 | 命を軽視 | 教え方がわからない | 教えられていない | その他 | |
| ある | 40 | 91 | 33 | 52 | 8 | 151 |
| ない,わからない | 13 | 52 | 16 | 25 | 2 | 75 |
| 計 | 53 | 143 | 49 | 77 | 10 | 226 |

| | 質問7 目的 | | | | | | | 合計 |
|----------|----------|------------|--------------|-------|----------|----------|-----|-----|
| | 命の大切さの理解 | 生と死について考える | 死へのプロセスの理解** | 自殺の予防 | 恐怖をやわらげる | タブーを取り除く | その他 | |
| ある | 115 | 55 | 57 | 25 | 16 | 13 | 2 | 151 |
| ない,わからない | 59 | 21 | 15 | 10 | 11 | 6 | 0 | 77 |
| 計 | 174 | 76 | 72 | 35 | 27 | 19 | 2 | 228 |

| | 質問8 問題点 | | | | | | | 合計 |
|----------|---------|---------|----|-------|----------|---------|-----|-----|
| | 指導方法 | 子どもへの影響 | 宗教 | 時間的余裕 | 子どもの死の理解 | 自然に学ぶもの | その他 | |
| ある | 85 | 57 | 38 | 25 | 20 | 10 | 2 | 149 |
| ない,わからない | 34 | 34 | 20 | 13 | 7 | 4 | 2 | 76 |
| 計 | 119 | 91 | 58 | 38 | 27 | 14 | 4 | 225 |

**p<0.01
(無記入は除外した)

う言葉の認知や内容の理解に対して、知っているという回答が3割に満たず、認知状況は低い。

2002年に行われた「大阪・生と死を考える会」のアルフォンス・デーケン氏の“心の癒しとユーモア—生の終わりを全うするために—”という講演会の来場者416名の一般成人を対象に同様の調査が実施されている。その結果、デス・エデュケーションという言葉を知ったことがあるとの回答は6割をこえていた(赤澤, 2005)。一般成人より看護学生の言葉の認知は単純に比較すると低いといえる。しかし、看護学生の3年次生に関しては他学年より有意にデス・エデュケーションという言葉の認知は高かった。これは1・2年次からの看護教育や看護実習による体験などから、デス・エデュケーションを知る機会に恵まれたのではないかと推測される。また、赤沢らの調査は、講演会内容に興味関心のある人々が対象者であったことも認知に影響していることが考えられる。

これらのことから、看護学生の興味・関心の程度や、どのような知識や経験を積んでいく教育過程の時期であるかということも認知状況に影響すると考えられる。そして重要なのは、デス・エデュケーションという言葉そのものの認知ではなく、内容の理解である。看護学生の“デス・エデュケーション”という言葉の認知は低かったが、“死についての学び”や“いの

ちの教育”を受けたことがあるかの問いでは、全体の6割以上の学生が学んだ経験があると答えている。そのうち、小・中・高校までの時期に学んでいる学生は約6割であることが分かった。デス・エデュケーションは死についての学びであり、いのちの教育と同意であるという認識には差がみられたが、看護学生の多くは過去にいのちの教育の機会に恵まれてきたと考えられる。しかし、本調査は某看護短期大学1施設のみでの調査であるためこの結果を一般的な看護学生の認識であるということとはできない。今後、他大学の学生の認識や教育背景の影響を調査・比較検討する必要がある。

2. デス・エデュケーションの捉え方

デス・エデュケーションの必要性を看護学生に問うたところ、ほとんどの学生が何らかの必要性を感じていることが分かった。なかでも「子どもが命を軽視しているような傾向があるから」との回答が最も多かった。また、目的としては「命の大切さ・尊さを教える」との回答が最も多かったが、これらの理由として、女子小学生が同級生を殺害した事件にみられるような、凶悪犯罪の低年齢化がマスコミなどでも大きく取り上げられており、社会的背景が影響していることが考えられる。

アルフォンス・デーケン(1988)は、デス・エ

デュケーションの目標として15項目を示している(図4)。看護学生の結果と一般成人の結果(赤澤, 2005)を比較すると、必要性や目的について、最も高い割合で回答されている項目は同じである。しかし、一般成人の調査において、必要性に関しては「現実の死を体験する機会が減っている」「命の始まりの性教育は行われているが、終わりの死の教育は行われていない」の項目でも60%以上の回答がある。また目的では「死へのプロセスや、死にゆく患者の多様なニーズを理解すること」「自分自身の死を準備し、生と死についてよく考えるように促すこと」の項目においても50%以上の回答がみられ、幅広く必要性や目的が回答されている。それに対して、看護学生の結果には特定の項目への比重が大きく、偏りがみられる。そのため看護学生にとってデス・エデュケーションの目的や必要性が多岐にわたり幅広いものだという認識は乏しいのではないかと考えられる。

デス・エデュケーションの望ましい開始時期においては、看護学生は「小学校5・6年から」という回答が最も多かったが、一般成人の調査結果では、「小学校入学前から」が28.5%と最も多い結果がでている(赤澤, 2005)。しかし、上記のようにデス・エデュケーションの目的そのものが多岐にわたっていることから考えると、開始時期の捉え方が異なっても不思議ではない。子どもの死に対する認識に関しては、3歳から10歳までの子どもに対する調査で、子どもたちの死に対する見方が異なる。3～5歳は死がどのようなものであるか分からず、5～9歳では死は離別した人で死者と同一視される傾向があり、死を擬人化している。9歳以上になってやっと死は身体的生命の停止であるという認識を持つようになると報告されている(勝俣, 2005)。このように、デス・エデュケーションといっても発達段階によって死の認識が異なるため、発達段階に応じた教育が必要である。

これらのことから考えてみても、デス・エデュケーションの問題点は「指導方法が確立されていないこと」が最も多い回答だったことは、目的が多岐にわたっていることや、多様な発達段階に応じた教育が求められていることが影響している結果だといえる。そのため、指導方法が

確立されていないことに対する問題を解消するためには、発達段階をふまえながら多岐にわたる目的の理解を、どのように指導していくのかということを考えていく必要がある。

3. 看護学生におけるデス・エデュケーションの方法・取り組み方

看護学生は、「ターミナルケア」や「延命治療と尊厳死」など、今後の自分たちに関連する専門性のあるテーマに多く関心を抱いていることが分かったが、記載は3割に満たず少なかった。

勝俣(2005)による、ある高校生の生と死のイメージに関する調査では、「高校生の最も関心のある時間は“近い未来”“現在”が9割を占め、“遠い未来”は1割にも満たなかった。さらに7割が“自分の死について考えることがある”と答えているが、自己の人生のなかに“死後のこと”“人生の終末”“老後のこと”を位置づけているものは極めて少ない」と報告されている。つまり、若者にとっての関心は近いところに向き、死は遠い存在であるといえる。また、過去にいのちの教育経験のある群とない群における影響として、「死へのプロセスや、死にゆく患者の多様なニーズを理解すること」の目的に有意差があった。このことから、若者にとって遠い存在である死を近い存在としてより理解を深める必要があることを認識するには、過去の学びの積み重ねが少なからず影響していると考えられる。

本来、看護学生や一般大学生、年代や職種の違いによって、デス・エデュケーションの目的が異なるということはない。例えば、デーケン(1988)の示したデス・エデュケーションの目的で「告知と末期癌患者の知る権利」「死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題」「医学と法律に関わる諸問題」などの理解を深めることは、一見医療関係者の目的のように思える。しかし、多くの人が自宅ではなく病院で死を迎えるようになり、死を目の当たりにすることがほとんどなくなった今日、死を理解するための積極的な姿勢が求められている。さらに、治療も医師任せであった時代から、現在は患者本人が治療を自己決定していく時代になってきている(關戸,

- ① 死へのプロセス、死にゆく患者の抱える多様な問題とニーズについての理解を促す
- ② 生涯を通じて自分自身の死を準備し、自分だけのかけがえのない死を全うできるように、死についてのより深い思索を促す
- ③ 身近な人の死に続いて体験される悲嘆のプロセスとその難しさ、落とし穴、そして立ち直りに到るまでの12段階について理解する
- ④ 極端な死の恐怖を和らげ、無用の心理的負担を取り除く
- ⑤ 死にまつわるタブーを取り除く
- ⑥ 自殺を考えている人の心理について理解を深める
- ⑦ 告知と末期癌患者の知る権利についての認識を徹底させる
- ⑧ 死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題への認識を促す
- ⑨ 医学と法律に関わる諸問題についての理解を深める
- ⑩ 葬儀の役割について理解を深め、自身の葬儀の方法を選択して準備するための助けとする
- ⑪ 時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促す
- ⑫ 死の芸術を積極的に習得させ、第3の人生を豊かなものとする
- ⑬ 個人的な死の哲学の探究
- ⑭ 宗教における死の様々な解釈を探る
- ⑮ 死後の生命の可能性について積極的に考察するように促す

図4 デス・エデュケーションの目的

デーケン・A：＜叢書＞死への準備教育 第1巻 死を教える（第1版）、メヂカルフレンド社、1988、p.6-48 から引用

1999)。そのため、自分の死の有り様を自分で考えなければならないし、また考えておかなければならないことから、生涯教育として全ての人にデス・エデュケーションは必要である。

しかし、看護学生にとっては特別にデス・エデュケーションの講義を設けずとも、看護専門教育のなかで工夫していくことで取り組んでいくことができる。例えば一つの方法として、人体機能的形成学・生理学・免疫学の講義で、生の終わりの細胞死ではなく、個体の生にとって必要不可欠な生理的細胞死である「アポトーシス」を講義内容に取り入れて学生の意識の変化をみた研究（平峯、2002）がある。この結果、学生の死に対する負のイメージがとれ、死は生にとって必要なもの、自然なものと考えられるようになり、死をより身近に捉えることができ、看護学生の死の準備教育の第一段階として有効であったと報告されている。デス・エデュケーションは教育方法が確立されていないことで難しさが指摘されているが、上記の報告は看護教育のなかでの取り組み方や方向性を示唆していると思われる。

全ての人にとってデス・エデュケーションは必要であると述べたが、特に「患者の死を日常的に体験しなければならない医師や看護師は、とりわけ死に対する成熟した態度を身につける必要がある」といわれている（デーケン、1988）。しかし、核家族化の進行や病院死の増加などの

社会的背景は、若者から身近な人を亡くす悲しみや、死とは何かを体験する機会を奪っていると考えられる。これらのことから、看護学生においても、自分の身近なニュース、近い未来や現在のことにばかりに関心を持つだけでなく、広くかつ人生の終焉まで見通す視野が必要であり、その様な看護教育における取り組み方も考えていく必要があるといえる。

VI. 結 論

1. 看護学生の“デス・エデュケーション”という言葉の認知は全体の28.0%と低いが、過去に“いのちの教育”は65.9%の学生が学んでいた。
2. デス・エデュケーションの目的や必要性は多岐にわたるが、看護学生の認識には偏りがあった。教育の時期に関しては、発達段階をふまえた指導方法の確立が必要である。
3. 生涯教育として全ての人にデス・エデュケーションは必要であるが、特に看護学生には重要である。若者は死を考える機会が減少しているため、死を身近なものとして捉えられるような看護教育の取り組みを考えていく必要があることが示唆された。

謝 辞

本研究の主旨を理解して、調査に協力していただいた看護学生の皆様に感謝します。

文 献

赤澤正人, 坂口幸弘, 中西健二, 松城里香, 谷 莊吉 (2005) : 一般成人を対象としたデス・エデュケーションに関する意識調査—学校現場で生と死を教えることについて—, ホスピスと在宅ケア, 13(1), 23-27.

デーケン・A (1988) : <叢書>死への準備教育 第1巻 死を教える (第1版), 2・6-48・53, メヂカルフレンド社, 東京.

平峯千春, 近藤美月, 南妙子, 岩本真紀, 近藤裕子 (2002) : 看護学生の死の準備教育に関する研究—新入生の死に対する意識はア

ポトース学習後に変化する—, 香川医科大学看護学雑誌, 6(1), 123-128.

勝俣暎史 (2005) : 若者の死生観, 教育と医学, 53(6), 15-21.

小谷みどり (2003) : 死をめぐる我が国の現状, 2005-9-15 閲覧, <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/note/notes0304.pdf>

小原信 (2005) : 「死の意味」の教育・そのあり方, 教育と医学, 53(6), 4-14.

關戸啓子(1999) : 生涯教育としてのデス・エデュケーションの必要性—我が国における死の看取りの変遷を通して—, 川崎医療福祉学会誌, 9(1), 61-68.

鈴木康明(2001) : デス・エデュケーションとは, 健康教室, 52(13), 8-10.

Nursing Students' Knowledge and Views on Death Education

Fumie BESSHO and Hiromichi EZUMI

Abstract

The purpose of this survey was to understand what nursing students know about death education. Our information is based on a survey of 232 nursing students. The following results were obtained:

1. A minority (28.0%) of the respondents merely knew the word "death education", however, a majority (65.9%) of respondents answered that they had studied "life education."
2. The purposes and necessity for death education varies and students did not understand them equally. The assignment about the suitable stage of death education is that the teaching method in consideration of a developmental stage is established.
3. Death education is essential for all people in all stages, but it is especially indispensable to nursing students. The opportunity to consider death seems to be decreasing, especially for young men. We recommend a nursing education procedure that greatly enhances understanding death as a familiar thing.

Key Words and Phrases: death education, nursing students